

# じっきょう

## 地歴・公民科 資料 No. 73

もくじ

巻頭

トピックス

新シリーズ

新シリーズ

シリーズ(終)

図書紹介

高校生にもできる「思いを形に」 ～東北支援ボランティア活動の取り組み～ ／堀口 博史……………	1
明治大学平和教育登戸研究所 —資料で考える戦争と平和—／渡辺 賢二……………	6
図版で読み解く世界史 世界地図「帝国連合」を読む／平田 雅博……………	10
歴史エピソード イスラームの女性／江川 ひかり ……………	13
韓国の教育問題3 『高等学校韓国史』を読む／三橋 広夫……………	16
……………	20

### 巻頭

## 高校生にもできる「思いを形に」 ～東北支援ボランティア活動の取り組み～

埼玉県立上尾橘高等学校教諭 堀口 博史

2011年3月11日14時46分

日本における観測史上初のM 9.0を記録した東北地方太平洋沖地震が起きました。発生直後から、地震・津波の被害の映像が繰り返し流されました。その後は、東京電力福島第一原子力発電所の事故に加え、計画停電と流通の混乱、さらに現在は放射能汚染被害の深刻化へと、事態はますます重大化しています。

さて、震災直後から「がんばろう」の大合唱の中、全国各地で募金活動や物資の支援活動がおこなわれました。緊急対応としてそれらは必要ですが、自分たちが住む関東地方のすぐ隣で起きた震災被害者に対してできることは他にないのか。教育に携わる者として、自問自答する日々が続きました。

日頃、担当する社会科の授業で「学び、考え、意見し、行動する」必要性を痛感していました。学校



仙台市にある宮城野体育館前でボランティアスタッフから話を聞く生徒たち

は効率的にたくさんの知識を学ばせようと思いますが、「考え、意見し、行動（させる）」は二の次の感が否

めません。そんなジレンマも抱えていました。

## 「思い」をどう形にするか

4月中旬、企画委員会で旧知の川田先生が「思い」を語りました。川田先生は宮城県に親戚がいて、何か力になれないかという思いを強く持っていました。旧県立騎西高校に行き、避難していた福島県双葉町役場の担当者と何回かコンタクトも取っていました。ただ、担当者は避難者の対応で忙殺され、具体的な形は見えませんでした。

川田先生と私で「弾丸ボランティアツアー to 石巻」に参加しました。埼玉県議の藤本正人氏（元中学校教諭）が主宰する長距離バスを使った0泊2日のツアーで、県内の小中高の有志の先生が参加しました。5月20日（金）夜に埼玉県所沢市を出発、翌日（土）午前5時頃に仙台市内に到着し、東松島、石巻、女川など壊滅的な被害を受けた町々を視察しました。津波で根こそぎ流され、見渡す限りの広野（荒野）となってしまった場所、撤去した瓦礫の山、水田は海水による塩害も起きていました。当然、田植えも一切なし。船やトラックが田んぼに突っ込んだままの所もありました。漂々異臭……被害の実態に認識を新たにしました。簡単に「がんばろう」などと口にははいけないのではないかと、心が折れる凄まじさでした。

午前8時過ぎに専修大学石巻校舎に設営されているボランティアセンターに到着しました。ボランティアの仕事は、「依頼主様」からの要望を受けたセンターが割り振ることで決まります。当日近くまで、どんな作業になるかわかりません。当日は、住宅の側溝にたまったヘドロをかき出す作業でした。実働4～5時間でしたが、腕の筋肉はパンパンになり、途中休憩を入れても厳しい作業でした。

その後、家を流されて公民館で避難生活をしている方や、ご自身も被災された小学校の先生にお話を伺いました。「1週間に1度しかお医者さんが回ってこない。喘息気味の子どもが心配で」と語るお母さん。「まだ、おにぎり菓子パンが主食で」と語る方。何ともやりきれない気持ちでした。それでも小学校の先生が「子どもたちがやりたいと言うので、来週（5/28）運動会をやることにしました」と語ったように、明日の希望を信じて、それに向けて前進しようとしている姿に感動しました。

帰着は5月22日（日）午前5時。このツアー参



加は、具体的なスケジュールや手続き、事前準備に必要なものなどを考える上で非常に参考になりました。

## 高校生にもできる活動に！

早速、具体的な企画作りに入りました。「これなら長期的に、リピーターも含めた高校生の参加が期待できる」形を創造したいと思いました。そして学校行事として参加させるため、次の観点に留意してプランを練り直しました。

- ①真夏の暑い日は熱中症の心配もあるので、時期は6月中に設定する。
- ②長距離夜行バスは安価だが、睡眠が十分に取りにくく、現地に行っただけで体調を崩されても困る。健康面を考え移動時間をなるべく短くし、活動も含めて日帰りとしたい。
- ③家計的に厳しい子どももいるので、意欲だけでも参加できる支援対策を考える。

旅行社の東武トラベル（株）に要望しながら正式な企画を立てました。同時に、本校のPTA・後援会役員の方にも金銭面の補助を含めてご理解とご協力を求めました。校長はじめ管理職も積極的に県教委との折衝にあたってくれました。

途中、「日帰り往復1万円」のJR新幹線バス（期間限定）があることがわかったり、移動距離にかかる時間からボランティアセンターは石巻ではなく仙台駅に近い仙台市津波災害ボランティアセンターにしたりするなど、日々刻々と計画を変更しつつ詰めていく作業が続きました。

参加生徒の集め方も試行錯誤でした。6月2日の朝礼時に全校生徒に訴え、実際の募集を始めました。受付初日（6月6日）、当初30人としていた定員はあっという間に超えてしまいました。急遽ボランティアセンターに無理をお願いし、40名までの受け入れを承諾していただきました。急な日程案内にもかかわらず、6月10日までの最終締め切りで87名の参加表明がありました。16日の最終事前説明会まで、合計3回の説明会を設定し、ボランティア活動の意義、何のためにボランティアに行くのか、被災者の方々の気持ち等々を話しました。その趣旨を理解し、さらに自分持ちで用意する出費（ボランティア保険・入浴料・弁当で2000円。さらに個人の装備品）があることも含めて了承した生徒たちの中から、抽選という形で生徒36名を選びました（引率教員4名を含めて計40名）。

時間	内容
06:00	集合：JR大宮駅 豆の木広場
06:46	JR大宮駅発（やまびこ301号）
08:58	JR仙台駅着。バスにて移動
10:00	仙台市津波災害ボランティアセンター（VC）着。受付後スタッフから説明を聞く。
11:00	作業開始（途中、昼食休憩） <b>■A班</b> 3年生1名+1年生8名+教員1名 菅原さん宅の家内整理 <b>■B班</b> 3年生4名+2年生14名+教員2名 佐藤さん宅敷地の蓄積ヘドロ等除去 <b>■C班</b> 3年生9名+教員1名 菊川さん宅の家内整理
14:30	活動終了。バスでVCへ。 道具等の返却と長靴洗浄と消毒。 VCセンター長の挨拶。
15:50	仙台市内の「極楽湯」で入浴。
17:20	JR仙台駅着。
18:05	JR仙台駅発（やまびこ320号） 車内で弁当。しおりの感想等、記入。
20:18	JR大宮駅着。諸注意後、解散。

## 生徒は何を感じたか

当日の6月18日（土）は涼しい風の吹く曇天で、ボランティア活動にはベストコンディションでした。仙台駅周辺はかなりきれいにされており、被災地とは思えない様子でした。しかし、海岸の目的地に向かっていくと、今なお無残な姿がたくさん残っていました。

活動場所は仙台市宮城野区中野牛小舎付近で、海岸から2kmほどの所でした。建物が残っていても中はぐちゃぐちゃ、家の土台ごと津波で流されてしまった所もたくさんありました。活動場所近くにあった小学校の体育館では、避難していた100名以上が津波で一度に亡くなったそうです。

さて活動を始めると、生徒たちはすぐに要領よく作業を進められました。被災した「依頼主様」からいろいろな話を伺ったり、「依頼主様」の「思い出し」をしたり、ボランティアに来ていた会社の大人たちと意気投合したり・・・、さまざまな出会いもできました。「時間が足りない！」「もう少しなのに！」となかなか作業を終わろうとしない姿、目の輝き、感想文の内容、どの場面からも、生徒たちが

**被災地支援ボランティア活動**  
**参加者募集！**  
**～「がんばろう 東北！」プロジェクト**  
**埼玉県立上尾橘高等学校編～**

日にち：6月18日（土）  
 集合：6：00 JR大宮駅「豆の木広場」  
 帰着：20：30頃予定（JR大宮駅）  
 内容：新幹線と貸切バスで宮城県仙台市方面へ行き、必要なボランティア活動を行います。  
 募集人員：30名（本校生徒・保護者・教職員が対象）  
 費用：交通費 約1万8000円（⇒全額補助！）  
 ※次の実費のみ必要です。  
 ボランティア保険・入浴料 約2000円  
 3食の食費、長靴、汚れてもよい衣服、帽子、防塵マスク、ゴーグル（メガネでも可）等  
 ★参加者には、事前説明会をおこないます。  
 申し込み方法：川田先生、堀口先生まで連絡。



生徒に告知した校内案内



有意義な体験をしたことがうかがえました。

ボランティアセンターのスタッフの皆様にも、手取り足取りお世話になりました。「家を取り壊すしかないのに、それでも、長年住み続けた家の中をきれいにしてからにしたい。そのためにボランティア依頼してくる方もたくさんいます。その被災された方の心をよく感じ、考えてください」。最後にこう締めくくって話してくれました。引率教員がさらに2名参加してくれたことも、生徒たちを安全に導いていくうえで大変助かりました。

さて、生徒たちはどんなことを感じたのでしょうか。以下、感想から抜粋してみます。

- 到着前はあんなに大変な状態だとは思っていませんでした。住宅地だった場所は何もなく、目を疑うような状態でした。最初はどこから手をつければいいのかわからないほどでした。作業をしていくうちにもっと頑張らなければと思うようになっていき、疲れも忘れて必死に作業していました。(3年男子)
- はじめは私たちの活動を見守っていた「依頼者様」が、気を遣ってくれたのかもしれませんが、午

後の作業で自ら家に入り、家族のことについて話してくれたときになんとかほっとしました。心を開いてもらえた気がしたのです。(3年女子)

- みんなで協力して家具をどかしたその下から「写真」「年賀状」「プリクラ」「賞状」「学校の文集」等たくさんの思い出のもの



活動場所付近の被災地の様子



屋内清掃に見つかった「家族の思い出の品」

のが見つかった。写真や幼稚園で描いた絵も水でぐちゃぐちゃになっていたが、懐かしそうな表情でそれを見ていた。(3年女子)

- 道ばたにトロフィーが置いてあった。「空手準優勝」って書いてあった。そのトロフィーは、誰かが磨いて、持ち主が見たらわかるようにちゃんと高いところにかけていた。ちょっとしたことだったけど、小さな助け合いが間近に見えた。(3年女子)
- 3月にテレビで見た光景よりきれいになっていたが、実際に見るととてもひどい状況でした。ニュースだけではわからない臭いや被害の状況が詳しくわかった。例えば、自分が手伝いをした家は、海が見える場所でもないのに、津波が2階より上まで来たらしく、庭には貝があったりした。僕のグループは家の中を片付ける仕事でした。汚泥やヘドロにまみれて、女の子用のメモ帳、子どものおもちゃが出てきて、作業を進めて行くにつれて「数ヶ月前までは、平和にここで遊んでいたんだなあ」と思った。思い出の品がいっぱいあった。グループの仲間と協力して、「このような仕事は協力できなきゃできない仕事」だと思った。とてもいい経験になりました。

(1年男子)

- ボランティアを通して、自分の怠けたところが直せた気がする。依頼者の人ともたくさんコミュニケーションがとれてよかったと思います。銀メダルを探してほしいって言われてたのに、(おもちゃの)金メダルしか見つけれなくてすごいショックだった。半分くらいしかきれいにできなかったからショックだった。もし、またこういうことがあったら、ぜひ参加したいと思います。(1年女子)

- 人と人とのつながり。自分から行動し、少しでも笑顔が見たいと思った。東北の人に対しての言葉遣いや気配り。どのような言葉がいいのか、どのよう



被災した「依頼主様」と、お別れの記念撮影

に接すればいいのか考えさせられた。コミュニケーションの大切さ。作業はとても辛くしんどかったが、達成感も大きかった。自分自身の生活を見直すきっかけとなった。作業する時間が短かったので、時間の大切さを痛感した。普段の生活を幸せに感じた。

(3年男子)

- 橘高校でこういう活動ができたのが何より感動です。みんなで協力してできたのも感動です。自分がこんなに頑張れると思わなかったので、そういう自分も見つかったのでよかったです。(3年女子)

- 他のボランティアグループの方々ともコミュニケーションがとれて、お互いに励まし合って活動をし、本来ならば大変なはずの作業も自分から進んで「もっとやらなきゃ」「次に何をやるのか」など積極的に活動に参加することができました。(2年女子)

後日、ある「依頼主様」から「ボランティアで自宅の清掃活動にいらしてください、ありがとうございます。元気で活動的な皆様のパワーで、こちらでも元気をもらいました。お蔭様で自宅もかなりきれいになりました。」というお礼のメールをいただきました。

「ボランティアは『してあげる』ものではない」と言われますが、まったくその通りで、自分の心に充実感や満足感が得られる活動でした。

余談ですが、参加生徒代表4名は、6月21日に県教育長を表敬訪問しました。暑い7月20日に全校報告会をした際も、全校生徒がシーンと静まりかえって耳を傾けていました。被災地では今なおボランティアが足りません。今後も「人助けの行動=自分の成長」の輪を、教育現場から広げたいと思います。